

外国につながる子どもへの エンパワーメントとしての学習支援活動

石川県金沢市 一般社団法人 日本語まなびサポート北陸

活動の内容

一般社団法人日本語まなびサポート北陸（まなサポと略）では、石川県金沢市を中心に、外国の子どもたちへの日本語や教科学習の支援活動を2009年から続けてきています。学習支援が単に学習だけの支援ではなく、外国の子どもへのエンパワーメントにつながると信じて進めてきました。

具体的な活動は、①毎週1回のサポーターによる日本語や教科学習の支援、②外国の子どもへの進路選択への助言や進路ガイダンスなどの実施、③サポーターへの研修から成ります。

活動の背景

1990年に改正された出入国管理及び難民認定法が施行されてから、日本への移住外国人は右肩上がりに増え続けてきています。石川県金沢市は、それほど外国人が集住しているところではありませんが、少子高齢化や人口減少を背景に、急速に受け入れが増えていく特徴があります。自分の意思で国境を越える大人と違い、子どもはある日突然異なる環境に身を置くことになります。金沢市や近隣の市町は、外国の子どもを受け入れが外国人集住地域ほど慣れていないこともあり、学校だけでなく、地域全体で取り組んでいく必要がある場所だと言えます。

まなサポで行っている活動は、そんな子ども

もたちが日本語や教科学習がスムーズにできるようにするためのものです。なお私たちはこのような子どもたちを、必ずしも外国籍ではないため、「外国につながる子ども」と呼んでいます。まなサポは、2009年に金沢大学の国際学類で日本語教育学を教えた深澤（筆者）が、当時の学生とともに始めたボランティア団体が母体となっています。その頃金沢国際交流財団の職員の方から、父親の仕事に伴い来日した中国人生徒が高校進学を目指しているが、日本語や教科の勉強の進め方がわからず困っている、という話が飛び込んできました。日本語教育を専攻する学生たちに相談したところ、すぐにでもサポーターを進めようということになったのです。毎週1回、一般的な日本語の勉強だけでなく、高校生入



試に必要な教科の学習や面接の準備などのサポートを続け、この生徒は無事、高校に入学を果たしました。

活動の理念

この時、学生たちと団体のシンボルマークを作りました。金沢市の前身である「加賀藩」の前田家の梅鉢紋を模したもので、子どもを中心として、5枚の花びらが保護者、学校、学生ボランティア、地域のサポーター、行政のネットワークを表しています。子どものサポートは、皆が協力して行わなければ、効果が出ません。子どもが自立できるまで、絶対に取り残さない、という強い気持ちの表れです。



最初のシンボルマーク(梅鉢紋で、真ん中に子ども、周りに保護者、学校、学生ボランティア、地域のサポーター、行政が囲む)

そして今、外国につながる子どもの社会参加を後押しするために

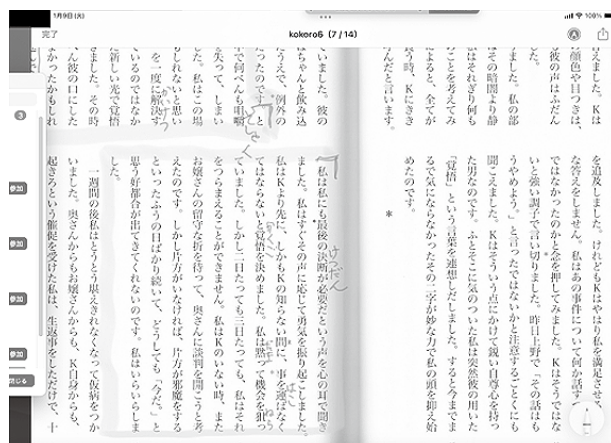
2009年から2025年の現在、16年が経ちましたが、これまでずっと継続してサポート活動を行ってきました。記録を取り始



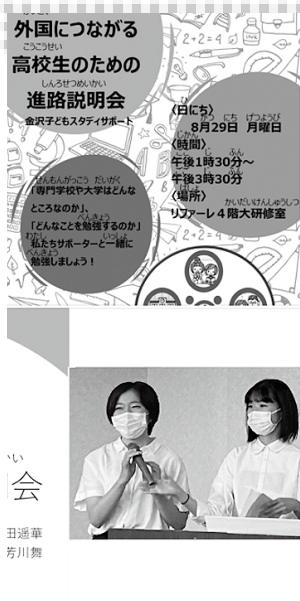
対面での学習支援の様子。ベトナム、ネパール、中国、アメリカなど、様々な国籍の子どもが熱心に学習する

めてからですが、2024年度末までの活動回数は601回、サポートした外国につながる子どもの延べ人数1978人、サポーターの数2586人でした。

まなサポのミッションの第一は、外国につながる子どもへの日本語や教科の学習支援を行うことです。最初にも述べたように、進路選択の支援を行うことにも力を入れていきます。外国につながる子どもは、進路に関する



オンラインでの様子(画面共有で教材を見せながら実施)



大学生が主体で開催した「外国につながる生徒のための進路説明会」



情報が日本人家庭の子どもより得にくく、在留資格と関連した壁が存在することもあるため、進路選択が難しい現状があるからです。実は以前にサポートした、ある外国につながる子どもたちの忘れない思い出があります。高校卒業の年度を迎えたその生徒は、進路を選択する時期にきました。近隣の私立大学に進むという話が持ち上がり、彼は身近で大学に入るの自分が初めてだと嬉しそうにしていました。私たちも彼の大学受験への万全のサポートを行おうとしていました。ところがある日、私たちのところに来た彼は明らかに肩を落としていました。何があった

のか聞いたところ、急にお父さんが進学を許可してくれなくなったと言うのです。家族も進学を応援してくれていたのではなかったのか、経済状況が急に悪くなったのか、事情がわからないまま、慰める言葉もありませんでした。

外国につながる子どもにとって、自分はどうな道に進みたいのか、そもそもどんな進路が開かれているのかなど、知らなければならぬことが多くあります。保護者も十分な知識がなく、子どもに正しい助言ができないこともよくあります。例えば、国籍によって選択できない職業があったり、在留資格によって、進路を変更しなければならなかったりすることがありますが、専門的な知識が必要となり、的確な情報をつかむのはそれほど簡単なことではありません。外国につながる子どもにとっての進路選択は、将来の社会参加を実現するための切符のようなものですが、それを手に入れるための困難が母語話者生徒よりもはるかに大きいのが特徴です。

私たちの団体では、外国につながる子どもたちの学校で習う勉強を手伝うことが多いのですが、子どもが学習に苦労していたら、目の前の学習項目だけに注目するのではなく、後ろを振り返りどこでつまづいたのかを確かめ、次は遠くを見てこの学習がその子どもの進路の何につながっていくかも考えていくこ



学習支援者のための研修会(オンラインで使用するペンタブの使い方)

と、それを心がけながら活動をしています。外国につながる子どもたちは、これからの日本社会や地域を支え、日本と子どもたちの母国との交流を担っていく人になるのです。外国につながる子どもたちが将来の夢を自分自身で実現し、社会参加をする力をもつこと、それはその子どものためでもあります。実は今の日本社会のため、そして、「あしたの地域」をつくることにつながるのではないのでしょうか。そのことをもっと日本の人々にも知ってもらいたいと願っています。

(一般社団法人日本語まなびサポート北陸 代表理事 金沢大学名誉教授 深澤のぞみ)